

# 人としてのステイヴンソンと その名作詩集「子供の詩園」

下 条 信 敏

## 一

ロバート・ルイス・ステイヴンソン (Robert Louis Stevenson-son) は、幼少の頃から極めて病弱であつた。殊にその青年時代は、病弱薄幸で種々の危難困苦と戦はなければならなかつた。しかし、それにも拘らずその性格には、病者特有の陰鬱な影は少しも認められず、あらゆる困苦や病患と雄々しく戦つて朗かに世を終へたのである。

彼は、一八五〇年一月二三日 Scotland の主都 Edinburgh に生れ、父の 'Thomas'、祖父の Robert は、共に名譽ある、しかもその名譽に値する功績ある燈台建築技師であつた。彼の周囲の人々は、彼の父祖が燈台建築技師として勝ち得たこの名譽を、上なき名譽と思ひ込んでゐたので、父 'Thomas' は、独り息子の彼も、また当然名譽ある父祖の家業を継ぐものと考へ、彼自身も、幼少の頃は、己もまた父祖に劣らぬ優れた燈台建築技師たる

ことを希望してゐた。かうした地盤と、彼の希望にも拘らずついにこれを一擲して文学に趨つたといふ一事を觀ても、その文芸への欲求の如何に強く如何に深かつたかと窺はれる。

十七才の頃、彼は、目ざす燈台建築技師への修業のため Edinburgh University に入学したものの、彼の心に火花を<sup>おこ</sup>し、彼の想像力に火を点じないような学問は、全く無益に思はれ、大学の学科に不満と倦怠さへ感じ、むしろ Edinburgh の町の方が、遙かに智的な刺激に富んでゐる氣持がした。こんなわけで、つい課業を怠り、あちこち歩きまはつては、緑の岡に坐つて、白雲の流れる大空を仰ぎ、自然の表情を讀み、自然の聲に耳を傾けるのであつた。かうしてゐる間に彼の外界を觀ぬく眼は、日を追うて鋭くなり鍊磨されつゝあつた。だから、この大学教育は、彼の心の成長には、さまで関与するところがなかつたけれど、この事がまたおのづから彼の眼を自然に誘ふ契機となつて、彼の外界に対する觀察の眼は、急に開け始めたのである。

こんな生活が続けること三年半、ついに堪へ切れなくなつた彼は、或る日父に、将来文学を以て身を立てたいと告白した。父 Thomas は、おどろき且つ失望したものゝ、親の威力で無下に斥けるのも、また、後日に悔を残す所以であると悟り、一先づ彼の技師断念の希望を容れることにした。しかし、彼は、直ぐには文学に走らず父の意向のまゝに、二十一才の時、転じて大学に法律を学び、後四年にして辯護士の資格を得たが、この仕事は頗る閑散であつたので、實際はこれに従事しなかつたといつていゝやうな有様であつた。その後は、身体の保養のためもあつてひたすら旅から旅への生活が続けた。一八七四年、フランスに渡り、そこで年上の一米国婦人 Mrs. Osborne と相愛の仲となつた。この婦人は、夫との間に円満を缺き別居してゐたが、二人の子供に、フランスの教育を授けるために来てゐたのである。彼の、彼女に対する思慕の情は、日にまし募るばかりであつたが、既に人妻のことゆゑどうするすべもなかつた。しかし、この出来事こそは、実に彼の一生に重大転機を劃するもので、彼の文学的労作とは不可分の関係をもつてゐる。一方、このオズボーン夫人は、やがてアメリカに帰り、夫に離婚を要求し、遂にその意を果した。夫人のこの意向と、その病氣の報に接した時、彼は、如何なる困難と戦つても彼女との結婚を成就しないではおかぬと決意した。むろん、彼の両親はかうした結婚に賛成する筈もなく、又、一面自らの健康がアメリカへの渡航に堪へ得るか否かも甚だ不安ではあつたが、彼は断乎として決行した。この無断の行動を快く思はぬ父親からは送金は絶え、旅の疲れに身は極度に衰弱し、遂に病に伏

し一時は命も覚束なく思はれたが、幸ひにもオズボーン夫人の手厚き看護で危き免がれ、やがて病も癒え、離婚手續を解決したオズボーン夫人と晴れて家庭をもつに至つた。この新妻こそは、彼の生涯の好き伴侶として、又彼の文学労作の助力者として、彼の才能を遺憾なく發揮せしめる上に尽すところ甚大なるものがあつた。

やがて父の怒も解けて再び故国に父母を訪れもしたが、その後再びフランスに渡り、南方の Hyères に居を定め、これを「閑寂荘」(La Solitude) と名付けてそこに静養してゐたが、後また英國に帰り Bournemouth といふところに住み、種々の小説など執筆してゐた。ところが一八八五年、驚異的に少年の心理を洞察しその生活を歌ひあげた名詩集「子供の詩園」(A Child's Garden of Verses) が始めて刊行せられ一世の視聴を集めることになつた。

## 二

「子供の詩園」は、彼が三十六才の作で、燦たる宝玉の光を放つてゐる。その中に収められた詩の初めて書き下されたのは、彼が、アメリカから Scotland へ帰つて、父母に会つた頃のことであつた。久々で生れ故郷に帰り、剩へ怒も解けた両親と親しく語り合つたのであるから、彼の感銘と追憶は、又格別であつたらう。放浪同然の旅を續けて、随処に転住した彼にとつて、幼時の思ひ出が、いかなつたかしくよみがへつたことであらう。しかし Scotland で書かれたのは、十余篇で、その後は、病氣やいろん

な事情の爲め中絶の止むなきに至つた。この詩集の大部分が作られたのは、主にフランスの「閑寂荘」にゐた時のことである。彼は、そのころも、なほ病と闘つてはゐたが、しかし、そのためにそれまでの遠しい生活から遠ざかることが出来た。幾らか心にゆとりが出来たある日、無邪気に戯れ遊ぶ幼児を見るにつけ、自づから己が幼時に思ひが運ばれ、中でも第二の母となつてはぐくみ育てゝくれた乳母 Alison Cunningham のことが懐しくてならず、感謝と思慕の情を筆々と胸に感じながらこの詩を書き綴つたのである。自己の幼時を歌つたこの詩集は、幼い頃を幸福に包んでくれた Cunninghamこそ、たつた一人の真の了解者であるから、誰よりもまづ彼女に献ぜられねばならぬと自から述べてをり、更に書物にして献げるからには、子供に応しい絵入りのできるだけ美しい本にしてあげたいといふ芸術家らしい念願を述べてゐるところを見ても、彼が如何に乳母 Cunningham に心を寄せ、真心をこめて書いてゐるかが窺はれる。

### 三

殆んど生涯を通じて彼の心の一隅を占めてゐたこの乳母 Cunningham は、彼の乳母となつた人の中で三人目の乳母で、彼のためには嫁にも行かず一生を捧げ、第二の母として奉仕し、か弱き彼を心から労はり慰めたのであつた。この乳母の、信心深い厳肅な性向は、想像力に富んで神経質で感受性の鋭い病弱な彼の心には葉が利きすぎたかも知れないが、その敬虔な心に、彼は、満腔の信頼と誠実こもつた尊敬の念を感じてゐたのである。彼女

は、その性向にも似ず、時には諧謔を以て彼を慰め喜ばせることもあつた。又時には、この余りにも感受性に富める子供には、ちよつとした遊が非常な興奮を惹きおこすことがあつて、急に玩具などは一切片附けて気を静めてやらねばならないこともあつた。熱に浮かされて眠られない夜などは、色々の物語などして淋しさを慰め、退屈を紛らしてやらねばならなかつた。いつまでもいづまでも目を覚ましてゐて暁の到来を待ち侘びて、退屈な夜長の終りを告げる朝の車の音を今か今かと聞耳を立てゝゐた辛い夜の思ひ出を書いた次の詩「病める幼児」の中に、

#### THE SICK CHILD

##### CHILD

O mother, lay your hand on my brow!  
O, mother, mother, where am I now?  
Why is the room so gaunt and great?  
Why am I lying awake so late?

##### MOTHER

Fear not at all; the night is still,  
Nothing is here that means you ill.  
Nothing but lamps the whole town through,  
And never a child awake but you.

##### CHILD

Mother, mother, speak low in my ear,

Some of the things are so great and near,  
Some are so small and far away,  
I have a fear that I cannot say.  
What have I done, and what do I fear,  
And why are you crying, mother dear?

#### MOTHER

Out in the city sounds begin,  
Thank the kind God, the carts come in!  
An hour or two more, and God, is so kind,  
The day shall be blue on the window-blind.  
Then shall my child go sweetly asleep.  
To dream of the birds and the hills of sheep.

\* \* \*

So in the dream-beleaguered night,  
While the other children lie  
Quiet, and the stars are high,  
The poor unused and playful mite  
Lies strangling in the grasp of fright.

O, when all golden comes the day,  
And the other children leap  
Singing, from the doors of sleep,  
Lord, take Thy heavy hand away,  
Lord, in Thy mercy, heal or slay.

#### 病める幼児

##### 子供

おゝお母さま、私の額に手を当てゝ見て！  
おゝお母さま、お母さま、私は今何にしてゐるの？  
なんでこの部屋、こんなに淋しく、こんなに大きいの？  
なんで私はこんなに遅くまで目が覚めてゐるの？

##### 母

少しも怖くはありません、静かな晩です、  
ここにはあなたを悪く思つてゐるものは居りません、  
町中で眼をさましてゐるのは街燈ばかりです、  
子供で眼をさましてゐるのはあなたばかりです。

##### 子供

お母さま、お母さま、私の耳にそつと囁いて下さい、  
えらい大きくて近いものもありますし、  
えらい小さくて遠く離れてゐるものもあります、  
私は怖くて話すことが出来ません。  
私は何をしたのでせう、私は何が怖いのでせう、  
そして、お母さま、あなたは何か泣いていらつしやるの？

##### 母

外の町では物音が始めました、  
ありがたい、色々の車がやつて来ました！  
もう一二時間もすれば神様のお蔭で、

水色の昼間の空が窓の日除けにうつります、  
さうなつたら可愛い坊やも安らかに眠りについて、  
小鳥や羊の遊ぶ丘の夢を見るのです。

\* \* \*

かくて夢に襲はれし真夜中に、  
他の子供等は静かにやすみ  
星は空高く輝く時、  
あはれ用なき遊び好きの幼児は  
悪夢に喉を絞められる。

あゝ日は黄金色に輝き出で、  
他の子供等が寢床からはね起きて、  
寝間のドアを歌で出で来る時、  
神よ、その重き御手を払ひ給へ、  
神よ、癒やすか死なすか、お慈悲のまゝに。

と歌ひいつ癒ゆとも知れぬ病に小さな身を蝕まれつゝ病床に横た  
はる世の可憐な幼児を思ふ時、人事ならぬ己が幼時を思ひ出して  
ゐる。そして熱に浮かされた幼児が、驚異を感じ恐怖に襲はれる  
様、己が悲しみを抑へて慰めを与える慈み深き母の愛情の美しさ  
が、類なく美しき言葉で語られてゐる。

彼の幼時には、この詩集の中にある「掛蒲団のくに」

### THE LAND OF COUNTERPANE

When I was sick and lay a-bed,

I had two pillows at my head,  
And all my toys beside me lay  
To keep me happy all the day.

And sometimes for an hour or so  
I watched my leaden soldiers go,  
With different uniforms and drills,  
Among the bed-clothes, through the hills;  
And sometimes sent my ships in fleets  
All up and down among the sheets;  
Or brought my trees and houses out,  
And planted cities all about.

I was the giant great and still  
That sits upon the pillow-hill,  
And sees before him, dale and plain,  
The pleasant land of counterpane.

掛蒲団のくに  
私が病気で寝てた時、  
お頭が楽になるやうに枕を二つ重ねて、  
玩具はすつかり側に置き、  
一日ちう楽しく遊びました。

時には一時間ばかりも、

私は見物しました、鉛の兵隊が、  
いろんな軍服をつけたり、いろんな訓練をしたり、  
蒲団の丘を進軍するのを。

時には船を幾艘も艦隊に仕立てゝ動かせた、  
敷布の間をあちこちと、  
又は木だの家だの持ち出して、  
そこら中に市を建てました。

枕の小山に腰を据ゑ  
眼の前に谷や平野、  
さては楽しい掛蒲団の国を見る、  
私は豪い静かな巨人でした。

で、寢床の上にいろいろの玩具をとり出して遊んで過した数多の  
病床の夜昼、及びこれと好き対照をなして更に華やかに思はれ  
る詩、

### IT IS THE SEASON NOW TO GO

It is the season now to go  
About the country high and low,  
Among the lilacs hand in hand,  
And two by two in fairy land.

The brooding boy, the sighing maid,  
Wholly fain and half afraid,

Now meet along the hazel'd brook  
To pass and linger, pause and look.

A year ago, and blithely paired,  
Their rough-and-tumble play they shared;  
They kissed and quarrelled, laughed and cried,  
A year ago at Eastertide.

With bursting heart, with fiery face,  
She strove against him in the race;  
He unabashed her garter saw,  
That now would touch her skirts with awe.

Now by the stile ablaze she stops,  
And his demurer eyes he drops;  
Now they exchange averted sighs  
Or stand and marry silent eyes.

And he to her a hero is  
And sweeter she than primroses;  
Their common silence dearer far  
Than nightingale and mavis are.

Now when they sever wedded hands,  
Joy trembles in their bosom-strands

And lovely laughter leaps and falls  
Upon their lips in madrigals.

今ぞ行くべき時ぞ

今ぞ行くべき時ぞ

おちこちの村里に、

手に手を取りて紫丁香花の間、

打揃ひておとぎの国へ。

思ひに沈む若人、吐息つく乙女、

喜びに胸はおどれど、半ば恐を抱き、

今ぞ遇ふ榛茂る小川の辺り

過ぎては躊躇ひ、止りては眺むる。

ひととせのむかし、楽しくも打揃ひて

互に転びつまろびつ戯れし二人ぞ。

口づけし、いをかひし、笑ひ、また、泣きし二人ぞ

ひととせの昔の復活祭に。

こころ

心臓は張裂け、顔は火と燃えて、

駆けくらに、男には負けじと走りし女ぞ。

恥ぢらはず、彼女の靴下止めを目にせし彼も、

今はその裾に触るゝもおぞし。

焰と燃えて踏段の辺りに佇む彼女、

彼はまたつゝしみの眼ざし伏せて、

そらしたる吐息をかたみに交はし、  
立ちて、物言はぬ眼を互に交はす。

彼こそは彼女にとりて心の主、

彼女こそは今桜草にも増して麗しく、

互に物言はね、そのいとしきは、

夜鳴鳥と鶉のそれにいとまさりて。

つなぎたる手を分つ時

喜びは胸底にわなゝきあふれ、

笑の恋歌心地よく

二人の唇に躍りつゝ浮かぶ。

がある外に、猶友達と夢中で遊んだ楽しい月日もあるのである。

彼の病弱がもたらした一つの出来事は、転地保養のために度々  
田舎のコリントン・マンス(Colington Manse)に滞在したこ  
とであつた。そこでの友達の中で Edinburgh の二人の従兄弟た  
ちと遊んだ時が、病的な苦々しいすべての要素が消え去つて最も  
楽しい思ひ出を残してゐると見え、彼は「あの頃が私の黄金時代  
であつた」と言つてゐる。この詩集の中の「進軍の歌」

#### MARCHING SONG

Bring the comb and play upon it!

Marching, here we come!

Willie cocks his Highland bonnet,  
Johnnie beats the drum.

Mary Jane commands the party,  
Peter leads the rear;  
Feet in time, alert and hearty,  
Each a Grenadier!

All in the most martial manner  
Marching double-quick;  
While the napkin like a banner  
Waves upon the stick!

Here's enough of fame and pillage,  
Great Commander Jane!

Now that we've been round the village,  
Let's go home again.

### 進軍の歌

櫓をもて来て吹き給へ！  
さあ、とつと進軍だ！  
ウィリは帽子を斜にかぶり  
ジョニーが太鼓を打ち鳴らす。  
メアリ・ジェインが指揮をとり、  
ピイター殿つとめます、

歩調をそろへて、気を張つて、  
みなよりぬきの擲弾兵！

げに勇ましい恰好で、  
みな駆足で進軍だ。  
ところで、ナプキン軍旗のやう  
杖のうへに翻る！

名誉、分捕品は十分だ、  
えらいぞ、ジェイン司令官殿！  
村を一巡したからにや、  
またもやお家へ帰りませう。

を味読すれば蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。

かの乳母 Cunningham こそは、彼の幼時の躰や物語の世界で  
絶えず彼に強い感化を与へ、彼の才能の最初の萌芽を培つてくれ  
たのであつた。それゆゑ彼の晩年常に思ひ出の種となつたのは、  
かゝる幼時のたわいない遊びほうけた時のこと、でなければ感受  
性の強い想像力の豊かだつた彼に無限の未知の世界を繰りひろげ  
てくれた物語本である。而もなほ生涯彼が忘れ得なかつたのは、  
乳母 Cunningham そのものが自らを犠牲にして尽してくれた真  
心に対する感謝報恩の念である。さればこそ、この乳母が病床に  
伏し、古い先も長くないと思はれた時、身の病弱をも顧みず、年  
ごろのひよわさ不運さに怯むことなく朗かな平靜な生活気分を以  
て生きぬくことの喜びを強く示して、懇ろに励ました慰めるこ



とを忘れたかつたのである。  
更にこの詩集の巻頭に掲げられた詩、

### TO ALISON CUNNINGHAM

For the long nights you lay awake  
And watched for my unworthy sake:  
For your most comfortable hand  
That led me through the uneven land:  
For all the story-books you read:  
For all the pains you comforted:  
For all you pitied, all you bore,  
In sad and happy days of yore:—  
My second Mother, my first Wife,  
The angel of my infant life—  
From the sick child, now well and old,  
Take, nurse, the little book you hold!  
  
And grant it, Heaven, that all who read  
May find as dear a nurse at need,  
And every child who lists my rhyme,  
In the bright, fireside, nursery clime,  
May hear it in as kind a voice  
As made my childish days rejoice!

アリスン・カニングガムに  
おまへが読んでくれたすべての物語本のために、  
おまへが慰めてくれたすべての苦みのために、  
悲しかったり楽しかったりした過ぎし日の  
おまへが憐れんで呉れたすべてのもの  
忍んでくれたすべてのものために！  
私の第二の母であり私の最初の妻でもある  
私の幼い頃の天使よ！  
今は健かで年取つてゐるあの病身な子供から  
乳母よ、その小冊子を受け納れておくれ！  
神様、どうぞ、読む人はみな  
あつた優しい乳母に用に立つて貰ひますやうに、  
楽しい炉辺の育児室のお国で、  
私の歌に耳傾ける子供は、皆、  
私の子供の頃を喜ばせてくれた  
あんなやさしい声で読んで貰つて  
それを聞きますやう！

を繕いて見ても慎つましい報恩の涙に咽んでゐると思はれる彼の  
心がよく現はれてゐる。

My second Mother, my first Wife,  
The angel of my infant life—

と呼びかけて、他の何人に対しても向けることのない一種の愛情を滲み出させてゐる。この詩こそ、実に母に対するよりも、妻に対するよりも、子に対するよりも、更に異つた、更に強い真情、あの乳母に対するあの彼にして初めて懐くことの出来る真情の流露、報恩の涙、純真極まる人情美で彩られてゐる。

#### 四

終生の長きに亘つて童心を持ち続けた彼が、その童心を心行く許り流露して、子供の生活を歌つた傑作「子供の詩園」には、染々とした懐しさを誘ふ幼時の追憶が浮び出てゐるのである。

凡そ幼時の思ひ出ほど人の心を惹くものは又とあるまい。遠い昔の出来事を記憶の奥底から呼び起して、再び現実の姿に返し、之を詩に綴り名作として世に残した文豪は、古来稀であるのに、彼はよくこれを成就したのである。この詩集には、一面、あらゆる児童に通ずる情念の結晶、何人も企て及ばぬ豊かな想像の世界が展開されてゐると共に、他面、その病弱にも拘らずあらゆる幸福を身に受けて、淋しい海のほとりに乳母と過した幼時の生活が、子供さながらの気分として赤裸々な言葉で歌はれ、そこに Stevenson その人の人格を流露してゐる。かく見るときこの詩集「子供の詩園」が、世界文学史上たぐひ稀なる存在であると言ひ得ることは誠に喜ばしい。尙またこの不朽の詩集が、病弱であつた作者が、その幼時恩愛を受けた乳母 Cunningham に捧げて、乳母の純情に報いたと言ふ至純な人情美に彩られてゐることは、大きな喜びでなければならぬ。

#### 五

父の死後一八八七年七月半ば、彼は、母と妻子を伴ひ、保養のためアメリカに向ひ、再び紐育(New York)を訪れた。その翌年六月には、沿岸巡航を志して買ひ求めたヨット「Casco」に乗り込み、妻子と共に金門湾(Golden Gate)を船出して、太平洋の波に揺られつゝ南へ向けて下つたのである。これが、ついに彼をして北米にも歐洲にも永の別れを告げしめる門出となつたのである。凡そ三年の間に、南洋諸島を殆ど余す所なく巡歴し、一八九一年には、Samoa 島の Apia と言ふ町の近くに落着くこととなり、一大邸宅を新築し、同年五月には、妻子母親の外に、娘 Mrs. Strong をも迎へ、始めて落着いた一家団樂の楽しみを満喫する機会を得たのである。こゝでは比較的健康にも恵まれ、その生活は近郷の太守さながらで、酋長などもよく彼を訪れ、土人からは大いに尊敬せられ、文学に世事にあらゆる方面に活躍して、土人からは、「物語る君」(Tusiata)と呼ばれた。一八九四年一二月三日の朝、彼は、「ハーミストン家のウィア」(Weir of Hermiston)を書いてゐたが、突然卒倒して再び起つこと能はず、遂にこの絶海の孤島が、彼の永眠の地となり、そのロマンチックな生涯に幕を閉ぢたのである。遺骸は Samoa 島の彼の邸宅の裏 Mt. Vaea の頂に懇ろに葬られ、その墓碑には次の自作の鎮魂の賦が刻んである。

## THE REQUIEM

Under the wide and starry sky,

Dig me the grave and let me lie,

Glad did I live, and gladly die,

And I laid me down with a will.

This be the verse you grave for me:

Here he lies where he longed to be;

Home is the sailor, home from sea,

And the hunter home from hill.

## 鎮魂の賦

広々とした星々の照るみそらそらの下に、

我が墓掘りてこの身を埋めよ、

我は喜びて生き、喜びて死に、

勇みてこゝに身を横へぬ。

これぞ我がために刻まん歌の句なる、

こゝにぞ眠る、彼があこがれの地に、

かの船子海より戻りて家にあり、

かの獵夫山より帰りて家にあり、

死に直面して作られたこの詩は、極めて沈着な態度で歌はれてゐる。彼は、生を楽しみ死を恐れず、寧ろ死を生の帰着点として悠揚迫らざる態度で視たところに彼の人生觀の基調が窺はれる。

幼時は病弱な児として育ち、青壯年に至つては不治の病を抱いて屢々咯血もした。かうして常に病魔に苦しめられながら死に対して恐怖の念を抱くことなく、命運のつゞく限り飽くまでも希望を抱いて之を楽しみ、而も敬虔な態度を以て平然として死に直面し、無類の無邪氣さを以て童心を歌ひあげ、何等懊惱の痕をとめないのは、彼の性情の豁達と、人生觀の恬淡なるところに起因するものと思はれる。

尙この詩集の中で、最も短い、全篇僅か二聯句からなる詩、

## HAPPY THOUGHT

The world is so full of a number of things,

I'm sure we should all be as happy as kings.

## 楽しい思ひ

世の中は物が沢山でいっぱいだ、

たしかにぼくらは王様のやうに幸福だ。

に歌はれた思想は未だ現実の世界を知らぬ純真無垢な子供のそれであり、およそ一切の子供に普遍的な真理であつて、これこそ正しく彼自身の本質を端的に投げ出した作である。生涯病褥に終始したとは言へ、彼の性格には、病者に特有の陰鬱な影は更になく、常に心の平靜と愉悦とを失はず、事物の光明面にのみ心を注いで飽くことを知らなかつた樂天的人生觀こそは、終始一貫した彼の対人生の態度であつた事が窺はれるではなからうか。

—— 本学教授 ——